

桃太郎

芥川龍之介

青空文庫

むかし、むかし、大むかし、ある深い山の奥に大きい桃ももの木が一本あつた。大きいとだけではない足りないかも知れない。この桃の枝は雲の上にひろがり、この桃の根は大地だいちの底の黄泉よみの国にさえ及んでいた。何でも天地かみびやく開かい闢びやくの頃ころおい、伊弉諾いざなぎの尊みことは黄よもつつひららささかか ややつつ いいかかずずももりりぞぞ 最津平阪もつひらさかに八つの雷を却けるため、桃の実を礫みにつぶつぶて

——その神代かみよの桃の実はこの木の枝になつていたのである。

この木は世界の夜明以来、一万年に一度花を開き、一万年に一度実をつけていた。花は真紅しんくの衣きぬ蓋がさに黄金おうごんの流蘇ふさを垂らした

ようである。実は——実もまた大きいのはいうを待たない。が、それよりも不思議なのはその実は核さねのあるところに美しい赤児あかごを一人ずつ、おのずから孕はらんでいたことである。

むかし、むかし、大むかし、この木は山やまたに谷おほを掩おほった枝に、累る々いるいと実を綴つづったまま、静かに日の光りに浴あびていた。一万年に

一度結んだ実は一千年の間は地へ落ちない。しかしある寂しい朝、運命は一羽の八咫やたがらす鴉すになり、さつとその枝へおろして来た。と
思うともう赤みのさした、小さい実を一つ啄ついばみ落した。実は雲くもき
霧りの立ち昇のぼる中に遥はるか下の谷川へ落ちた。谷川は勿もちろん論峯々の
間に白い水みずけぶり煙けぶりをなびかせながら、人間のいる国へ流れていた
のである。

この赤児あかごを孕はらんだ実は深い山の奥を離れた後のち、どういふ人の手に拾われたか？——それはいまさら話すまでもあるまい。谷川の末にはお婆ばあさんが一人、日本中にほんじゆうの子供の知っている通り、柴刈しばかりに行つたお爺じいさんの着物か何かを洗つていたのである。……

二

桃ももから生れた桃太郎ももたろうは鬼おにが島しまの征伐せいぼつを思い立つた。思い立つた訣わけはなぜかというと、彼はお爺さんやお婆さんのように、山だの川だの畑だのへ仕事に出るのがいやだったせいである。その話を聞いた老人夫婦は内心この腕わんぱく白ものに愛想あいそをつかしていた

時だったから、一刻も早く追い出したさに旗とか太刀とか陣羽織とか、出陣の支度に入用のものは云うなり次第に持たせることにした。のみならず途中の兵糧には、これも桃太郎の

註 文通り、黍団子さえこしらえてやったのである。

桃太郎は意気揚々と鬼が島征伐の途に上った。すると大きい野良犬が一匹、饑えた眼を光らせながら、こう桃太郎へ声をかけた。

「桃太郎さん。桃太郎さん。お腰に下げたのは何でございます？」
「これは日本一の黍団子だ。」

桃太郎は得意そうに返事をした。勿論実際は日本一かどうか、そんなことは彼にも怪しかったのである。けれども犬は黍団子と

聞くと、たちまち彼の側へ歩み寄った。

「一つ下さい。お伴ともしましょう。」

桃太郎は咄嗟とつさに算盤そろばんを取った。

「一つはやられぬ。半分やろう。」

犬はしばらく強情げうじように、「一つ下さい」を繰り返した。しか

し桃太郎は何といつても「半分やろう」を撤回てつかいしない。こうな

ればあらゆる商売のように、所詮しよせん持たぬものは持ったものの意

志に服従するばかりである。犬もとうとう嘆息たんそくしながら、黍団

子を半分貰う代りに、桃太郎の伴ともをすることになった。

桃太郎はその後のち犬のほかにも、やはり黍団子の半分を餌食えじきに、

猿さるや雉きじを家来けらいにした。しかし彼等は残念ながら、あまり仲なかの好い

間がらではない。丈夫な牙きばを持った犬は意気地いくじのない猿を莫迦ばかにする。黍団子の勘かんじょう定じょうに素早すばやい猿はもつともらしい雉を莫迦ばかにする。地震学などにも通じた雉は頭の鈍にぶい犬を莫迦ばかにする。——
こういういがみ合いを続けていたから、桃太郎は彼等を家来にした後も、一通り骨の折れることではなかった。

その上猿は腹が張ると、たちまち不服ふくを唱となえ出した。どうも黍団子の半分くらいでは、鬼が島征伐の伴をするのも考え物だとい出したのである。すると犬は吠ほえたけりながら、いきなり猿を噛かみ殺そうとした。もし雉がとめなかつたとすれば、猿は蟹かにの仇あ打だうちを待たず、この時もう死んでいたかも知れない。しかし雉は犬をなだめながら猿に主従の道徳を教え、桃太郎の命に従えと云

つた。それでも猿は路ばたの木の上に犬の襲撃を避けた後だったから、容易に雉の言葉を聞き入れなかった。その猿をとうとう得とく心くしんさせたのは確かに桃太郎の手腕である。桃太郎は猿を見上げたまま、日の丸の扇おうぎを使い使いわざと冷かにいい放した。

「よしよし、では伴をするな。その代り鬼が島を征伐しても宝たから物は一つも分けてやらないぞ。」

欲の深い猿は円まるい眼めをした。

「宝物？　へええ、鬼が島には宝物があるのですか？」

「あるどころではない。何でも好きなものの振り出せる打出うちでの小槌こづちという宝物さえある。」

「ではその打出の小槌から、幾つもまた打出の小槌を振り出せば、

一度に何でも手にはいる訣わけですね。それは耳よりな話です。どうかわたしもつれて行つて下さい。」

桃太郎はもう一度彼等を伴に、鬼が島征伐の途みちを急いだ。

三

鬼が島は絶海の孤島だった。が、世間の思っているように岩山ばかりだった訣わけではない。実は椰子やしの聳そびえたり、極楽鳥ごくらくちようの囀さえずったりする、美しい天然てんねんの楽土らくどだった。こういう楽土らくどに生せいを享うけた鬼は勿論平和を愛していた。いや、鬼というものは元来我々人間よりも享きよう楽らく的に出来上つた種族らしい。瘤取こぶりの話に出

て来る鬼は一晩中踊りを踊っている。一寸法師の話に出てくる

鬼も一身の危険を顧みず、物詣ものもうでの姫君に見とれていたらしい。

なるほど大江山おおえやまの酒顛童子しゅてんどうじや羅生門らしやうもんの茨木童子いばらぎどうじは稀代きだいの

悪人のように思われている。しかし茨木童子などは我々の銀座を

愛するように朱雀大路すざくおおじを愛する余り、時々そつと羅生門へ姿を露あら

わしたのではないであろうか？ 酒顛童子も大江山の岩屋いわやに酒ば

かり飲んでいたのは確かである。その女人にょにんを奪つて行つたとい

うのは——真偽しんぎはしばらく問わないにしろ、女人自身のいう所

に過ぎない。女人自身のいう所をことごとく真実と認めるのは、

——わたしはこの二十年来、こういう疑問を抱いている。あの頼ら

光いこうや四天王してんのうはいずれも多少気違いじみた女性崇拜家すうはいかではな

かつたであろうか？

鬼は熱帯的風景の中に琴を弾いたり踊りを踊ったり、古代の詩人の詩を歌ったり、頗る安穩に暮らしていた。そのまた鬼の妻や娘も機を織ったり、酒を醸したり、蘭の花束を拵えたり、我々人間の妻や娘と少しも変らずに暮らしていた。殊にもう髪の毛の白い、牙の脱けた鬼の母はいつも孫の守りをしながら、我々人間の恐ろしさを話して聞かせなどしていたものである。――

「お前たちも悪戯をすると、人間の島へやってしまふよ。人間の島へやられた鬼はあの昔の酒顛童子のように、きつと殺されてしまふのだからね。え、人間というものかい？ 人間というものは角の生えない、生白い顔や手足をした、何ともいわれず気味

の悪いものだよ。おまけにまた人間の女と来た日には、その生白い顔や手足へ一面に鉛なまりの粉こをなすつているのだよ。それだけならばまだ好いいのだがね。男でも女でも同じように、謙うそはいうし、欲は深いし、焼餅やきもちは焼くし、己惚うぬぼれは強いし、仲間同志殺し合うし、火はつけるし、泥棒どろぼうはするし、手のつけようのない毛だものなのだよ……」

四

桃太郎はこういう罪のない鬼に建国以来の恐ろしさを与えた。鬼は金棒かなぼうを忘れたなり、「人間が来たぞ」と叫びながら、亭ていて

々と聳そびえた椰子やしの間を右往左往うおうざおうに逃げ惑まどった。

「進め！ 進め！ 鬼という鬼は見つけ次第、一匹も残らず殺してしまえ！」

桃太郎は桃の旗はたを片手に、日の丸の扇を打ち振り打ち振り、犬ぬさるきし猿雉ぬさるきしの三匹に号令した。犬猿雉の三匹は仲の好いい家来けらいではなかつたかも知れない。が、饑うえた動物ほど、忠勇無双むそつうの兵卒の資格を具えているものはないはずである。彼等は皆あらしのように、逃げまわる鬼を追いまわした。犬はただ一噛ひとかみに鬼の若者を噛み殺した。雉も鋭くちばしい嘴くちばしに鬼の子供を突き殺した。猿も——猿は我々人間と親類同志の間からだけに、鬼の娘を絞しめ殺す前に、必ず凌り辱ろうを恣しにした。……

あらゆる罪惡の行われた後のち、とうとう鬼の酋長しゅうちようは、命をとりとめた数人の鬼と、桃太郎の前に降参こうさんした。桃太郎の得意は思ふべしである。鬼が島はもう昨日きのうのように、極楽鳥ごくらくちよう さええずの囀る楽土ではない。椰子やしの林は至るところに鬼の死骸しがいを撒き散らしている。桃太郎はやはり旗を片手に、三匹の家来けらいを従えたまま、平蜘蛛ひらくものようになった鬼の酋長おごそへ厳かにこういい渡した。

「では格別の憐愍れんびんにより、貴様きさまたちの命は赦ゆるしてやる。その代りに鬼が島の宝たからもの物ものは一つも残らず献けんじよう上じようするのだぞ。」

「はい、献上致します。」

「なおそのほかに貴様の子供を人質ひとじちのためにさし出すのだぞ。」

「それも承知致しました。」

鬼の酋長はもう一度額を土へすりつけた後、恐る恐る桃太郎へ質問した。

「わたくしどもはあなた様に何か無礼でも致したため、御征伐を受けたことと存じて居ります。しかし実はわたくしを始め、鬼が島の鬼はあなた様にどういう無礼を致したのやら、とんと合点が参りませぬ。ついてはその無礼の次第をお明し下さる訣には参りますまいか？」

桃太郎は悠然と頷いた。

「日本一の桃太郎は犬猿雉の三匹の忠義者を召し抱えた故、鬼が島へ征伐に来たのだ。」

「ではそのお三かたをお召し抱えなすったのはどういふ訣でござ

いますか？」

「それはもとより鬼が島を征伐したいと志した故、黍団きびだんご子をやつても召し抱えたのだ。——どうだ？ これでもまだわからないといえ、貴様たちも皆殺してしまふぞ。」

鬼の酋長は驚いたように、三尺ほど後うしろへ飛び下ると、いよいよまた丁寧ていねいにお時儀じぎをした。

五

日本一の桃太郎は犬猿雉の三匹と、人質に取った鬼の子供に宝物の車を引かせながら、得々とくとくと故郷へ凱旋がいせんした。——これだ

けはもう日本中にほんじゅうの子供のとうに知っている話である。しかし桃

太郎は必ずしも幸福に一生を送った訣わけではない。鬼の子供は一いちに

人前んまえになると番人の雉を噛み殺した上、たちまち鬼が島へ逐ちくで

電んした。のみならず鬼が島に生き残った鬼は時々海を渡つて来

ては、桃太郎の屋形やかたへ火をつけたり、桃太郎の寝首ねくびをかこうとし

た。何でも猿の殺されたのは人違ちがいだつたらしいという噂うわさである。

桃太郎はこういう重ねかさ重ねかさの不幸に嘆息たんそくを洩もらさずにはいられ

なかつた。

「どうも鬼というものの執しゅうねん念ねんの深いのには困つたものだ。」

「やつと命を助けて頂いた御主人の大恩だいおんさえ忘れるとは怪けしか

らぬ奴等やつらでございます。」

犬も桃太郎の^{じゆうめん}澁面を見ると、口惜し^{くや}そうにいつも唸^{うな}つたものである。

その間も寂しい鬼が島の磯^{いそ}には、美しい熱帯の月^{つきあか}明りを浴びた鬼の若者が五六人、鬼が島の独立を計画するため、椰子^{やし}の実に爆弾を仕こんでいた。優しい鬼の娘たちに恋^{やさ}をすることさえ忘れたのか、黙々と、しかし嬉し^{ちやわん}そうに茶碗^{ちやわん}ほどの目の玉^{かがや}を赫かせながら。……

六

人間の知らない山の奥に雲霧^{くもぎり}を破った桃の木は今日^{こんにち}もなお

昔のように、累々るるいと無数の実みをつけている。勿論桃太郎を孕はらんでいた実だけはとうに谷川を流れ去ってしまった。しかし未来の天才はまだそれらの実の中に何人とも知らず眠っている。あの大きい八咫やたがらす鴉は今度はいつこの木の梢こずえへもう一度姿を露あらわすであらう？ ああ、未来の天才はまだそれらの実の中に何人とも知らず眠っている。……

(大正十三年六月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

初出：「サンデー毎日 夏期特別号」

1924（大正13）年7月

入力：j.utiya

校正：かとうかおり

1999年1月8日公開

2012年9月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

桃太郎

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>